

特別な配慮を要する家庭の子どもたちへの支援となる絵本の分析

Analysis of Picture Books that Provide Support for Children
from Families with Special Needs

矢野 裕子
YANO Yuko

1. はじめに

絵本は、子どもの心を育みより良い人間関係を構築する一助となると考えられる。読み聞かせの文化ともいえるほど、わが国でも、絵本の読み聞かせは子育ての中に根付いている。

1960年代の初頭、瀬田（1985：31）は、子どもと絵本との最初の「出あい」とは何か、またそれにどんな意味があるのか、という問いを提起した。子どもはどのように絵本と出あい、絵本の世界を体験するのか。もちろん、家庭での子どもとの絵本の出会いはあるが、保育の場での絵本との出会いもある。横山・水野（2008：42）は、「保育の場ならではの絵本との出会い」の特徴として、子どもが絵本の世界を体験する際の自分ひとりの内的な体験と一緒に絵本を読みあった友達や保育者との共有体験という2つの特徴があることを述べている。絵本の読み聞かせは、親子の人間関係の構築のために重要な役割を果たしているとともに、保育の場での絵本がもたらす共有体験は子ども同士の間関係の構築や保育士と子どもの人間関係の構築のためにも重要な役割を果たしていると考えられる。

そして、現代社会では社会構造の変化に伴い、核家族化や地域とのつながりの希薄化によって、子育て家庭を取り巻く環境が大きく変化し、育児不安や孤立した子育て環境、育児問題に目を向けられるようになってきた。そのような中で、地域の子育ての拠点としての役割を求められている保育所における保育内容としても、絵本の読み聞かせは重要な保育内容となっている。

地域の子育ての拠点としての役割を求められている保育所には、「家庭支援の必要性」が重要視されるようになってきた。保育士養成課程等検討会の実施を経て改正され、2019年度より施行されている新保育士養成カリキュラム¹⁾により、「相談援助」「家庭支援論」「保育相談支援」の3科目が「子ども家庭支援論」「子育て支援」の2科目に整理統合され、「家庭支援論」は「子ども家庭支援論」となった。

保育における「子ども家庭支援」とは、個人的な「相談援助」や「エンパワメント」の必要性、重要性が不可欠であるとともに、保護者から家族、家庭、地域を視野に入れた支援体制について理解を深めることであると言えよう。子ども家庭支援の意義と必要性を考えるにあたっ

て、現代の社会的状況における家庭の課題について考えていくことが重要である。そして、保育士養成における家庭支援を学ぶための教科書的文献には、とりわけ特別な対応を要する場合はどう応じればいいのか考えさせる単元が盛り込まれるのが一般的である。具体的には、1. 孤立した子育てのなかで育児不安を抱える親、2. 精神疾患や発達障害、知的障害を抱える親、3. 障がい（障がいの疑い）のある子どもを持つ親、4. ひとり親家庭と離婚後の面会交流、5. ステップファミリー、6. 外国籍をもつ親、7. 経済的な問題を抱える家庭、8. ファミリーバイオレンス（児童虐待家庭、ドメスティック・バイオレンス家庭）などである。

2. 先行研究

絵本は、子どもの文化として語られることが多い。佐々木（1993）が「〈絵本＝遊び〉説だけでは、絵本に「ついて何も語っていないに等しい」と指摘するように、絵本には、教育的意義や芸術的意義もある。例えば、高橋（1999）らの、自由保育において、絵本を読むという子どもの自発的な行為の中に、生活科学習の萌芽が育つような環境を整えることも大切であろうと指摘した、絵本の教育的意義を見出した研究がある。さらに、絵本はメディアとしての価値を持って語られることも多い。

しかしながら、世界中の子育て文化のなかで、遊びとともに絵本がもたらす効果や絵本の魅力に迫りながら、絵本が根づいているのも実態である。絵本の読み聞かせは、伝統的に、言語獲得やコミュニケーション力の発達を促進し人間関係を豊かにし、さらに想像力を育み情緒や感性を豊かにするなど、様々な効果について指摘されてきている（今井他 1993）。

保育の場で、絵本体験が遊びとなって展開する際には、子どもたちの表現を保育者が助けている点も見逃せない。佐々木（2006：101）は、子どもたちと同じ絵本の世界を共有した保育者が、遊びとなって溢れ出てくる子どもたちの絵本の世界の物語やイメージを拾い上げ応答することで、ストーリーやイメージのつなぎ役となっていると指摘する。さらに、佐々木（2006：101）は、絵本と子どもたち同士の人間関係構築について、「幼稚園や保育園などで、保育者が誘導しつつ集団でごっこの世界が創り上げられてゆくと、クラスあげての一大イベントとなり、子どもたちの人間関係を大きく育てることがある。」と述べる。

子育て文化としての絵本の読み聞かせの意義もある。保育園や幼稚園、家庭のみならず、地域の子育て支援センターなどでも、子どもが心身ともに健康に育つ環境を保障するために、いろいろな遊び、制作活動、食育体験などのプログラムとともに、必ずと言っていいほど絵本の読み聞かせのプログラムが用意されている。子どもが心身ともに健康に育つ環境を保育園や幼稚園、地域で保障することで、子どもと子育て家庭を社会全体で支える構図ができ、絵本の読み聞かせや絵本が重要な役割を果たしているのである。

さらに、家庭においても、絵本の読み聞かせは保育園児保護者と幼稚園児保護者の8割以上

が行っていることがわかっており（古相・岡本 2017）、子育て期の親にとっても影響があるという研究がある（小林 2023）。小林（2023）らは、親は読み聞かせ中の子どもの反応から、子どもの成長を感じ取ることや、共に楽しめている感覚やコミュニケーションをとれているという感覚を得ており、それらが親自身の楽しみ・喜びになっていることを明らかにしている。

また、人間関係の構築の視座から分析した研究も多い。例えば、絵本を媒介とした母子相互作用の研究（菅井 2003、2004）や、佐々木（2001：31-40）の絵本の分析から父親がどのように描かれているのかを分析し、父親と幼い子どもたちとの精神的な交流の可能性を考察した研究がある。

幼稚園教育要領²⁾でも、言葉に対する感覚を養う点からまとめた「言葉」の領域で絵本について触れ、そのねらいとして「(3)日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、想像力を豊かにする」と述べている。さらに、平成12年4月1日から施行された新幼稚園教育要領³⁾においては、ねらい「(3)日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる」と改正されている。絵本や物語を通して想像力を豊かにするという教育的意図と、さらに人間関係の形成の推進に役立てるように示唆している。

以上のように、絵本を取り上げた先行研究は数多いが、本稿では、とりわけ特別な家庭支援の必要があるとされる家庭に暮らす子どもたちやその家族を題材に取り上げ、学生らが読み聞かせのために選ぶ絵本を対象として考察してみたい。

3. 研究の目的

特別な配慮を必要とする家庭に暮らす子どもたちやその家族を題材に取り上げている絵本を分析し、現場の保育士らが絵本の読み聞かせを通して子どもへの支援に役立て、クラスの子どもたち同士の相互理解と人間関係構築のための一助となるための基礎的資料を得ることを目的とする。

保育園や幼稚園において、絵本の読み聞かせの効果としては、クラスの子どもたちにも、特別な配慮が必要とされる家庭に育つ友だちの環境や気持ちが具体的にわかるであろうと考えられる。

4. 調査方法

- (1) 家庭支援論の授業内に、グループワークとして「特別な配慮が必要な家庭」のテーマの中から、各グループに一つのテーマを選ぶ。まず実態をつかみ、子どものニーズと親のニーズを考える。そして、保育士として、どのような支援ができるかをまとめ発表する。さらに、テーマに沿った絵本を1冊選び、読み聞かせをする。

- (2) 絵本を選ぶ方法としては、データベース「子どもの心を理解するための絵本」⁴⁾ や、絵本ナビ、国会図書館リサーチナビを用いて調べる。或いは短期大学内図書館、長岡京市図書館において実際に絵本を手にとって探す。
- (3) 家庭支援論の授業の最終日に、「保育園や幼稚園の先生になった時に、子どもたちに読み聞かせをしたい絵本」を一人5冊、順位をつけて選出する。

5. 学生らが選出した絵本

2020年から2022年の3年に渡ってデータを収集し分析した結果、学生らが選出し推薦した絵本から、子どもたち同士の相互理解と人間関係構築に係わる絵本が確認された。最も多かったもの10冊を下記の表に記した。

表

書名	テキスト	出版社	発行年	原作国
(1)-A『今日』	下田昌克 (イラスト) 伊藤比呂美 (翻訳)	福音館	2013	ニュージーランド
(1)-B『おへそのあな』	長谷川義史 (著)	BL出版	2006	日本
(2)『ぼくのせいかもーお母さんがうつ病になったのー』	プルスアルハ (著) 細尾ちあき、北野陽子 (訳)	ゆまに書房	2012	日本
(3)-A『十人十色なカエルの子ー特別なやり方が必要な子どもたちの理解のために』	落合みどり (著) 宮本信也 (著) ふじわらひろこ (著)	東京書籍	2003	日本
(3)-B『みんなとおなじくできないよ 障がいのあるおとうととボクのはなし』	湯浅正太 (作) 石井聖岳 (イラスト)	日本図書センター	2021	日本
(4)『ココ きみのせいじゃない』	ヴィッキー・ランスキー (著) ジェーン・プリンス (絵) 中川雅子 (訳)	太郎次郎社エディタス	2004 (1998)	アメリカ
(5)『ほんとうにかぞくーこのいえに養子にきてよかった』	のぐち ふみこ (作・絵)	明石書店	2005	日本
(6)『てぶくろ: The Mitten』	Brett, Jan (著) 岡田好恵 (訳)	岩崎書店	1999	ウクライナ 民話
(7)『きょうはおかねがないひ』	Kate Milner (著) こでら あつこ (翻訳)	合同出版	2020	日本
(8)『わかってほしい』	MOMO (著)	クレヨンハ	2004	日本

シリーズ名 月刊クーヨン 付録：9巻1等通巻94	YUKO (illustrations)	ウス		
-----------------------------	----------------------	----	--	--

これらの絵本は、親子の人間関係の構築のために、重要な役割を果たしていると考えられる。それでは、具体的にこの10冊の絵本について、本論文のテーマに沿って簡単に概観してみよう。テーマについては、1は「核家族化や地域とのつながりの希薄化による孤立した子育てのなかで、育児不安を抱える親」、2は、精神疾患（鬱病を含む）や発達障害、知的障害を抱える親、3は、障がい（障がいの疑い）のある子どもを持つ親、4は、ひとり親家庭と離婚後の面会交流、5は、継親の役割と継親子関係の難しさを抱えるステップファミリー5）6は、外国籍をもつ親、7は、経済的な問題を抱える家庭、8は、ファミリーバイオレンス（早期発見と通告が必要な子ども虐待家庭）とする。

(1)－A『今日』：核家族化や地域とのつながりの希薄化による孤立した子育てのなかで、育児不安を抱える親

ニュージーランドを中心とする英語圏に、赤ちゃんを育てている母親たちにエールを送る詩が伝わっている。子育てに余裕をなくしている母親に、「“いま” かけがえのないこの子をいつくしんでやっているのなら、それで大丈夫だよ」とやさしく寄りそう詩。すべてのお母さんを励ます。学生らは、核家族の孤立した家庭での子育てについて調べる中で、お母さんの大変さを理解し、この本を選択した。

(1)－B『おへそのあな』：核家族化や地域とのつながりの希薄化による孤立した子育てのなかで、育児不安を抱える親

お母さんのおなかのなか。おへその穴から見えるのは、お兄ちゃん、お姉ちゃん、お父さん。みんな、赤ちゃんが生まれてくるのを待っている。命の誕生を優しく楽しく描いた絵本である。学生がこの本を選んだ理由は、不安になったり、悲しくなったりしたときに、出産当日の感動した時のことを思い出さだろうからと言う。

AB いずれも、学生らは母親目線で選出しているため、子どもたちには難しいのかもしれないが、絵には赤ちゃんとママの様子が描かれている。読み聞かせの中で、子どもたちは何か感じとることであろう。

(2)『ぼくのせいかもーお母さんがうつ病になったのー(家族のこころの病気を子どもに伝える絵本)』：精神疾患（鬱病を含む）や発達障害、知的障害を抱える親

主人公のスカイは、元気のないお母さんのようすに「ボクのせいかも・・・」と心を痛めている。お母さんが、うつ病になったことを、子どもが理解していく。

この絵本は、子どもが読んで「ボクのせいじゃないんだ」と安心できるように、いっしょに読む大人には、「キミのせいじゃないよ」と伝えるために必要なことが書かれている。

『お母さんどうしちゃったの・・・：一統合失調症になったの・前編—(家族のこころの病気を子どもに伝える絵本)2013』や『お母さんは静養中：一統合失調症になったの・後編—(家族のこころの病気を子どもに伝える絵本)2013』もあるが、学生らを選ぶのは『ぼくのせいかも』である。鬱が日常的に知られるようになった現代、学生ら自身も経験することも少なくない鬱の症状が最も身近なのかもしれない。

(3)－A『十人十色なカエルの子—特別なやり方が必要な子どもたちの理解のために－』：障がい(障がいの疑い)のある子どもを持つ親

ADHD、自閉症やアスペルガー症候群の子ども本人や家族、学校の先生、まわりの子どもたちのために、「こんな子だっていたよねえ」「ゆっくりゆっくりおおきくならうね！」と語りかけていくので、子ども本人も読み聞かせてもらうことによって、不安解消になると思われる。

(3)－B『みんなとおなじくできないよ 障がいのあるおとうととボクのはなし』：障がい(障がいの疑い)のある子どもを持つ親

障がいのある「おとうと」がいる小学生の「ボク」の話。おとうとのことを好きだと思一方で、ときどき、ちょっと恥ずかしく、なんで、おとうとはほかの子とちがうんだらうと心配にも感じている。そんな複雑な感情と懸命に向き合う「ボク」。障がいのある兄弟姉妹をもつ子どもならではの悩みやわかってやれてなかったくやしなみだ、気づきなどの気持ちが描かれている。

学生らには、2020年にはA、2021年からはBと推移して、双方が同頻度で選ばれるので、どちらも取り上げた。アスペルガーやADHDといった障がい身近になった故か、これらの本が選ばれていた。

(4)『ココ きみのせいじゃない』：ひとり親家庭と離婚後の面会交流

家庭裁判所の待合室にもよく置かれているこの絵本は、これから離れて暮らすことになるママとパパも読んでおくべき絵本である。主人公のこぐまのココは、男の子でも女の子でもないユニセックスな存在である。親の離婚を経験する子どもたちは、ココをとおして新しい生活と自分の気持ちとうまくつきあう方法を見つけていく。北欧の親の離別後の子育てを学んだあとの学生たちは、離婚後も子どもと別居親が定期的に会うのは当然の子どもの権利だと理解できている。その前提があるためか、この本が選ばれる。

(5)『ほんとうにかぞく—このいえに養子にきてよかった』：継親の役割と継親子関係の難しさを抱えるステップファミリー

血がつながっていてもばらばらになる家族もあれば、血はつながってなくても、長い年月をかけてゆっくりとそしてしっかりと「ほんとうのかぞく」になっていく人びともいる。里親や養子縁組問題を考える絵本。昨今では、ステップファミリーに対して偏見をもつ学生は多くなく、とても身近なことのためか、再婚家族の問題ではなく、養子を迎えた家族を描いたこの絵本が選ばれる。ある日、「なによ！おじさん、おばさん」という女の子に、真剣に怒るお父さんと涙ぐむお母さん。女の子はハッと迷いがなくなる。読み聞かせでは、子どもたちにもこの意味は伝わるであろう。

(6)『てぶくろ』：外国籍をもつ親

雪におおわれた静かな森の道におじいさんが手袋を落とす。そのあたたかそうな手袋の中に、ネズミが、カエルが、キツネが・・・大きな動物までが次々に入ってくる。ラチョフの描く動物たちがいきいきして愛らしく、どの動物でも優しく受け入れる様子が共生社会そのものである。繰り返しのことばがリズムカルで楽しいウクライナの民話である。留学生らが身近にいる昨今の学生たちは、外国籍の子どもも皆お互いに思いやりを持って仲良く暮らせるという当たり前の思いを込めて選んだのであろう。

(7)『きょうは おかねが ないひ』：経済的な問題を抱える家庭

「うちのママはほんとにいっしょうけんめいおしごとをしてるし、おかねのかからないたのしいことをいっぱいしてるの。でもうちにたべるものがなくなっちゃったらママとフードバンクにいかないと。いつかはそんなしんぱいいらなくなるよね・・・」と、貧しい生活ながらも明日への夢と希望をもって楽しく生きる母子の物語。子どもたちは貧しい生活に偏見を持たずに、母親と二人で幸せに暮らす主人公に思いを巡らすであろう。ひとり親で一人の時間が多いともっと親と一緒にいたいだろうと予測する学生らにとって、この絵本は新鮮なのかもしれない。

(8)『わかってほしい』：ファミリーバイオレンス（早期発見と通告が必要な子ども虐待家庭）

父親からの虐待の当事者である女性が書いた絵本である。表紙に描かれたクマのぬいぐるみが、ページをめくるたびにボロボロになっていく。「にくいんだろ」に対して「ここしかないから」とか、「しんでびびらせるか」に対し「でもあきらめない」など、相反する二つの感情がそれぞれ白と黒の文字で重なるように書かれている。最後には、「わかってほしかった。」と締めくくられている。学生らは、DVに関連する絵本よりも、児童虐待に関連する絵本を選ぶ。学生らの年齢ではDVが見ている子どもにとっても暴力であり、児童虐待でもあるようには、まだ感覚的には感じないのかもしれない。

6. まとめ

本論文で取り上げた絵本とその簡単な考察から読み取れるのは、学生らは、そのテーマに沿った絵本を選出することができていることである。学生らは、選んだテーマについての実態を調べ、子どものニーズと親のニーズを考える。そのため、子どもたちの心に響くであろう絵本を抽出することができていた。

読み聞かせの効果に焦点を当てて考察すると、(1)では、ABともに、学生らは母親の大変さ、不安や悲しさを絵本を通じてより理解を深めることができていた。読み手が絵本を通じて理解を深めることは、クラスの子どもたちのイメージをスムーズに誘導するであろう。子どもたちが読み聞かされた時にも、母親の心を受け取り母親のことに思いを巡らすことができるであろうことが推測できる。(2)や(4)は、親の障がいや親の離婚についての絵本で、特に親の事情なのだが、子どもたちの心に焦点が当たっているものが選ばれていた。親が障がいを持つ子や親の離婚を経験する子の気持ちを、クラスの皆は理解していだろうか。(3)では、「みんなとおなじにできないよ」と絵で解説されているので、クラスの子どもたちが多様性を考え認めていくことができるであろうことが期待できる。(5)のステップファミリーでは、再婚家庭ではなく、敢えて養子を迎えた幸せな家族の絵本が選ばれ、いろいろな家族の形態があることが子どもたちには伝わるであろう。(6)は、ダイレクトに外国籍の家族の絵本ではなく、「てぶくろ」を比喻として用い、子どもたちの心に迫ろうとした上手い選択である。(7)は、子どもたちは貧しい生活に偏見を持たずに、母親と二人で幸せに暮らす主人公に思いを巡らすことであろう。(8)の児童虐待の絵本は、言葉が少ないので子どもたちにも伝わるかもしれないが、読み聞かせには慎重さが必要であろう。

絵本体験が想像する楽しさや創造的な面白さをもたらし、その想像と創造の体験を保育者や友達と共有したという絆の記憶が、子どもたちの背中を押して、困難に思える現実の中に踏み出していく力を与えることがある(村田・黒岩 2022:48)。例えば、登園時に母親と別れるのがつらかった園児が、幼稚園での楽しい体験を母親に話そうという保育者の呼びかけによって、幼稚園で保育者に読んでもらった絵本体験を思い出し、これから過ごす幼稚園での一日を絵本体験と重ねるようにして母親に語ったというエピソードがある(村田・黒岩 2022:48)。

学生らが自ら選出し、本論文で取り上げたすべての絵本は、想像と創造の体験を保育者や子どもたちに与え、それを共有し絆を深めることができるであろう。それは、特別な配慮を要する家庭の子どもたちとその友達たちとの絆が深まるということである。そして、その記憶は、特別な配慮を要する家庭の子どもたちにとって、困難に思える現実があった時、その子どもたちの背中を押す力を与えていくことであろう。

本調査で抽出された絵本は、学生らが保育園や幼稚園の先生となった時、「先生や友達と心を通わせる」ための一助となり、クラスの子どもたちの人間関係構築のために効果的に用いるこ

とができるであろうことを期待したい。

註

1) 2010年3月24日、保育士養成課程等検討会は、「保育士養成などの改正について（中間まとめ）」として保育士養成カリキュラム案をまとめ、2011年から保育士養成課程が実施されることとなる。以降、この保育士養成カリキュラムは計9回の保育士養成課程等検討会の実施を経て改正された。

2) 幼稚園教育要領 https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf 平成29年3月文部科学省

3) 新幼稚園教育要領 津金美智子編 2017 『新幼稚園教育要領ポイント総整理幼稚園 平成29年版』東洋館出版社

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/001/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2017/08/28/1394385_003.pdf 文部科学省

4) データベース「子どもの心を理解するための絵本」

佐々木宏子監修により鳴門教育大学付属図書館児童図書室に貯蔵され、鳴門教育大学のホームページで公開されている。また、CD-ROM (Windows 95,98,2000 対応) が佐々木宏子 2000『絵本の心理学』新曜社に添付されている。このCD-ROM (Windows 95,98,2000 対応) には、内外の絵本2,100冊 (日本語・英語版のみ) が入力されている。

鳴門教育大学図書館では佐々木(2000)らにより大規模なデータベースが構築されている。このデータベース「子どもの心を理解するための絵本」は、基本的な書誌情報はもとより、6個の大主題 (subject heading) とそれに連なる280の主題 (subject) をもとに分析・入力されている。以下、データベースを確認しながら、佐々木(2001)の論文から詳細を以下に引用しておく。主題の件数は現在のデータベースを確認しながら、筆者が現在の件数に変更した。データとして入力されている基本的な書誌項目としては、①絵本のタイトル、②画家・作家、③翻訳者、④シリーズ名、⑤出版年、⑥出版社。翻訳絵本であれば、⑦原著タイトル、⑧原著発行国、⑨原著出版社、⑩原著発行年が付け加えられている。さらに、⑪文字あり・なし、⑫受賞歴の情報が入力されている。主人公のプロフィールは、⑬性 (男・女・中性〈事物等〉・男女〈複数の主人公〉)、⑭年齢層 (A 赤ちゃん、B 幼児、C 小学校低学年、D 小学校高学年、E 中・高校生、F 成人、G 老人、H 生涯〈主人公の障がいを追う〉、その他) にわけられている。大主題は、1「生活と自立」(358items)、2「自我・自己形成」(703items)、3「友達・遊び」(949items)、4「性格」(436items)、5「心」(616items)、6「家族」(245items) に分けられている。これらの主題は、5つまでの主題が自由にクロスできたり、主題×主人公の年齢、画家や作家×主題、出版年代×主題など、様々に検索できるシステムとなっている。約2,800冊の絵本の書誌情報が入力されている。鳴門教育大学学術研究コレクション(nii.ac.jp)。京都西山短期大学研究紀要『西山学苑』第16号(2021:1-20)より抜粋、加筆修正して再掲。

5) ステップファミリー

多様な形態がある。「再婚・事実婚によって、血縁関係のない親子がいる家族のこと」をいう。子連れ再婚家庭もその一つであり、養子縁組家庭もその一つの形態である。

引用文献

1. 今井靖親 中村年江 1993 「絵本の読み聞かせに関する心理学的研究(IV)－幼児の物語理解に及ぼす視点と絵本提示の効果－」奈良教育大学教育学部附属教育実践研究指導センター 教育実践研究指導センター研究紀要 2 pp.67-75
2. 小林優花 2023 「絵本の読み聞かせが親性に与える影響についての検討」 ヒューマンサイエンス No.26 pp.23-26
3. 佐々木宏子 1993 『新版 絵本と子どものこころ－豊富な個性を育てる－』 JULA 出版局 242
4. 佐々木宏子 2001 「絵本は父親をどのように描いているか－心理学的分析試論」 絵本学会研究紀要: bulletin of Ehon-gakkai Associates (3) pp.31-40
5. 佐々木宏子 2006 『絵本は赤ちゃんから－母子の読み合いがひらく世界』 新曜社
6. 菅井洋子・秋田喜代美・横山真貴子・森田洋子 2003 「ブックスタート協力家庭の母子相互作用(4)－母と子をつなぐ媒介手段としての指さし－」 日本発達心理学会第 14 回大会発表論文集
7. 菅井洋子 2004 「絵本を媒介とした母子相互作用の発達的研究－理論的枠組みの検討－」 日本女子大学大学院紀要 家政学研究科 人間生活学研究科 第 10 号 日本女子大学 pp.21-28
8. 瀬田貞二 1985 『絵本論：瀬田貞二子どもの本評論集』 福音館書店
9. 高橋敏之・木内菜保子 1999 「自分と学校・近所の人々とのかかわりを主題にした絵本と小学校生活科学習との関連性－先行体験としての幼稚園教育における絵本環境(1)」教育実践学研究 The journal of studies on educational practices1(1) pp.65-73
10. 古相正美・岡本満江 2017 「保育園・幼稚園に通う乳幼児の家庭における絵本読み聞かせの実態」 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 Bulletin of Nakamura Gakuen University and Nakamura Gakuen Junior College(49) pp.25-34
11. 村田康常・黒岩茉由 2022 「絵本の読みあいから生まれる「人間の絆」－保育の場での子ども読者論の試み」 名古屋柳城女子大学こども学部 『名古屋柳城女子大学研究紀要』第 2 号 pp.55-77
12. 横山真貴子・水野千具沙 2008 「保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義－5 歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から」 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター 『教育実践総合センター研究紀要』17 巻 pp.41-51